

以上の点から香葉律師が元親の子弟であることを証する史実は何もありませんが、彼が一時的であつても讃州塩飽を領していたことは考えられなないことでは無いし、まして長曾我部氏の支族であれば、主君元親に従つて朝鮮に役に従軍したであらうし、そのさい塩飽水軍をひきいて、同じく瀬戸内水軍の將であつた毛利高政と親しくしたであらうことは充分に考えられることとあります。(おあり)

研究

潮谷寺古佛の由来

伝説は蛇神族の産んだ話か

赤松会員 山岩 田 善 市

潮谷寺本尊阿弥陀如来の古伝説によると、僧が四国土佐から佐伯に使船、蛇になつて上陸、山の中で脱皮して如來となり、被護の上にお立ちになられた。それを聖人が發見して終には潮谷寺の御本尊として祀られたと云うお話してあります。發見された所にあつた蛇の被護を集めて祀つたのが汐月の辰長良大権現、湖沼になつて辰長良神社となつています。そしてこの附近の村々、汐月、守山、江頭、相江、津志師成をまとめて辰長良といひます。大分大学の富永先生のお説によりますと、蛇神と呼ぶのバトビ、トベ、ナガ、ナガラなどゝ奇名があるとのことですから、辰長良大権現は辰長(ナガラ)の地即ち蛇神族の地に蛇神として祀られたことになります。更に佐伯氏の居館跡と思われる上の台、上ノ屋敷は辰長良大権現に続く台地であつて、佐伯氏は祖母殿大明神といふ大蛇神の子孫でありますから、土佐の國から蛇神が蛇神の子孫佐伯氏を頼つて蛇神族の地に來て蛇神として祀られた

たことになり、面白く伝説であります。又伝説中にある塩月村善右工門の住居の地は八頭(ヤカシラ)という所で、昔ここに一つの塚があつて、それをあひいて左方ら入つて頭が蛇が居たのでヤカシラと名付けたといふことです。伝説には直接関係はありませんが、佐伯惟治を祀つた神夜は富尾(トビウ)、鷗尾(トビウ)、鷗野尾(トビウ)等と云い蛇神の名が付けられています。辰長相江には富尾(トビウ)の姓がおります。蛇が穴軒もあり、堅田にも或尾(トビウ)の姓がおります。やはり蛇神族の關係でしょう。こうした事からこの伝説をみると、蛇神説は阿弥陀如来の渡來をからませた、佐伯の産んだ民俗説話ではありますまいか。

さて次に土佐から乗船した僧が蛇になりましたが、人が蛇になつたり蛇が人になつたりする話はい、昔話も縁起物語によくあります。ごん話も蛇そのものの話で日まぐ、神仏とか又は英雄とかを偉大な力の持主として恐れ崇め信仰の方便的な物語になつています。この伝説では阿弥陀如来の本尊によつて、誰でも極樂往生が出来ることと云う尊い仏の、聖妙不思議を現すことを強調した話となつています。昔の人はこの伝説を有難く信仰したものでしょう。然しこの伝説が産まれるような、何かとあるにちがいありません。そこでこの伝説を史実に還元して考えたい。昔にどうなりましようか、無論無理な話ではあります。他に解くような文献もなし、何かの手掛りを求めて想像によつて話を進める目かありませんが、あえてその危険をおかしてみようと思ひます。

先ず土佐から僧が船に乗り、その船は佐伯帰りの船であり、船着場は古市という港になつています。この話を時代の考察してみますと、古市が港として存在したの日は、佐伯惟治が相竿礼城に据つて威勢を張つた当時の城下所であつた關係だと思ひます。そうすると凡そ千五百年代ではないかと想定されます。潮谷寺について沿革を調べてみますと、永祿年間大友

宗麟高谷寺を高畑に創立したことにたり、昌泰上人が關山と交つています。伝説の仏、本尊阿彌陀如來を迎え友が慶長十八年(一六三三)で現在の地口寺を移した四世登善上人の時であり、如來はそれまでは汐月の百姓家白井家に祀られ、其の後岸河内大願寺に祀られ、焼け出されて高畑の者が乞い受け、その後潮谷寺に祀るといふので軋々として場所を変えていすのも寺に祀るべき仏と俗人が祀ることについて、いくらか重荷を感じていたのが原因ではないかと推察されます。そうしますと渡来以来のこの間はあまり長い期間では無い様で考へられます。

次に岸河内の大願寺がいつ頃の創立かが判明すると仏の渡来時期の想定が参考になると思いますが、天正十四年十一月四日(一五八七年)佐伯、島津兩軍の堅田合戦の時、島津軍の放火にあつて全焼し、昭和十五年又火災によつて家録其の他全部灰となりまし、創立年月日も其の間の沿革も不明であります。左の遺物としてあるのは大願寺跡(地蔵庵)に祀られていた像十一面觀音、阿彌陀如來、神像ではないかと思われ、各一併つてあり、その他經文、金剛般若波羅密經、大般若波羅密多經各一卷ありてあります。大願寺跡(寺座敷)にあつたと云う南朝年号元中七年(一三九〇年)の五輪塔はありますが、岸河内一帯には五輪塔はいたる所にありますので、この塔と寺の關係はわかりません。したかつて伝説の時代についてはいさく手掛りはつかいません。大願寺に祀られた如來は堅田合戦に焼け出された事にちつていますが、祀られた年代は不明です。

岸河内には今一つ所寺がありました。高城は佐伯氏居城の跡と考えられ、ほど近い岸河内村工屋(タクミヤ)に佐伯氏の信仰厚かつた金剛寺がありました。大友興慶記にはこの寺の名が二度出ています。惟勝、惟常の兄

弟は仲悪く、惟常は伊豫の國に渡り、おりあ北は惟勝を攻め滅ぼさんとねらつていました。「正月十六日は惟勝毎年さだまりて、堅田金剛寺へ御出の嘉例有、此際を伺ひ徽州より佐伯に渡り惟勝の住居木戸城を攻めらる」とあり、又同書「堅田合戦之事并御殿狀」に「去程に高木越前守を奉行にて、首并に死骸を集め普坂峠に塚を三つ築かせ、金剛寺に於て布ひ有て塔婆を立つ」と出てゐるところからみると、佐伯氏と關係深い、堅田に於いては名高い寺であつたと思おれます。古来の古い伝承によりますと、波越の我成寺、常樂寺(江國寺古記由来伝による)と共にキリシタン大名大友宗麟の諸寺取毀しに会い廢寺にされました。金剛寺は廢寺のままとなつて、唯寺座敷のみ残り現在が畑となつています。附近には五輪塔が三四十こころがついていて、復元すれば完全なものも多くあります。去る年大雨の左め畑が崩れ、素焼の小さな仏がざる一俵にも洗い出され、それを潮谷寺に納めたと云い伝えられてあります。

一方大願寺は宗麟の寺取毀しの対象にもならなかつた程の小さを寺が、龍堂位のものであつたのが、金剛寺廢寺の後に大きく浮かひ上つたものでないかと思ひます。こう考へると伝説の阿彌陀如來も何かこの時代に大願寺に祀られていたのではありますまいか、天正四年(一五七六年)頃ではないかと思ひます。いざれにしても時代の想定はなかなか困難であります。

以上の事から戦国時代のいさかを感じますので、仏の渡来と戦國の世とかりに想定しますと、ここに一つ史實が浮かび出て来ます。それは土佐の國司中村の御所(高知縣中村市)一條兼定卿のことです。

長曾我部元親の爲土佐を逐おれた兼定卿(大友興慶記には康政とあるが誤り)が僧となつて、九州の一大勢力者大友氏を頼り土佐より渡来したが、北風に流されて佐伯宮の内

に漂着しました。その時問題の阿彌陀如來を奉持したと

約三万、之に對する官軍は約六万。戦死者各六千余。

西郷がこの拳銃に積極的になつたことは事實のようにあり、西郷の重んずる大義名分が欠けてゐるよう思われる。にもかかわらず、鹿兒島士族の暴発を押えることが出来ず、これを慰撫することが出来ない以上、

ひとり身をかくして難をさけるか、政府にくみして士族を鎮圧するか、士族に擁せられて政府と対決するか

それ以外に道はなかつた。そして情に厚い彼は最後の道を選んだ。勿論名分の乏しいことは遺憾の上で、勝敗を度外視して鹿兒島士族と生死を共にしたと云つてもよいであらう。

(著者住所 南海部郡本庄村大字三股)

毛利家の法要に参詣して 判 宗 弘

去る十月四日、東京から久々に黒田久子様、毛利千代子様お二方が佐伯にお帰りになり、午後二時から養賢寺で速陀院殿(毛利高兼元正爵)墓院殿(同夫人)三十三回忌の法要が営まれた。史談会にもお参りせよ頂いたので、高木会長と私とが代表して、矢野会の方や西夫人の孝友達に加つて参詣した。いと盛南宮御苑御殿であつた。

毛利高兼元正爵は明治九年肥後守土目藩主細川家より入つて、佐伯藩第百六代高兼公の後を嗣がれ、ドイツに由る存心、佐伯に帰られ、明治四十年の頃御一家東京に御引越まで佐伯にお住居になり、今因にお帰りの西夫人と佐伯小宮様に存心は、自藩主御一家と佐伯町とはまことに密接親愛の年月を返され、大正昭和と年を経ても何彼と旧縁土に對する愛顧がつづいたのであつた。よきに類のない羨ましい縁であつたと、心にとり思つた。

(るべじよりのつぎ)

いふ事になりますと、問題は解決の方向へ前進するのておりませんが、残念ながらそれを証する何ものもありません。左を想像によるをけですが、私は面白い問題だと思

いまして曾となつた兼定と志保が、休承の古伝と、地と對象に、この古伝の伝説をといひ、なさいと思ひます。(つづく)

研究

佐伯の港はどんなに勤さとしてゐるか

——主として木材の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校教諭 同 校御土誌クラブ顧問

本会会員 市野 頼 仁

第二章 佐 伯 港 (つづき)

五、海上輸送の特色及び問題点と佐伯港

(お新り) 千定と変更して四の「佐伯港における臨海工業の動向」から独立して本稿五の項目をとることにした。

(一) 海上輸送の特色及び問題点

内 航 海 運

二平合板の社長村上博之氏の言葉を借りれば、我が国は大変な大食漢の国であるという。そのわけは、日本の主要な港は外国より龐大な原料を呑みこみ、これに加して海外に輸出する貿易国であるとの比較である。社長はつづけて、製品を佐伯から福岡へ陸送するので、大坂へ海上輸送するのと輸送費が同じ位であつたのが、近頃海上運賃が上昇したので、かたがた陸運にきりかえざるを得なくなつた。

地方港が輸入した原料と製品として出す場合は、主要港から出港する場合が多い。従つて主要港の錯綜ぶり